

「繰り返しの先にあるもの」

創世記 44:1-16
マタイによる福音書 5:21-26

2025年9月14日
稲葉 基嗣 師

旧約聖書の「コヘレトの言葉」という書簡の中に、こんな言葉があります。「かつてあったことは、これからもありかつて起こったことは、これから起こる。太陽の下、新しいものは何ひとつない。」(コヘレトの言葉1:9)どれほど新しいと思えることでも長い目で見ると、かつて誰かが経験したことばかり。多くのことは、繰り返し、繰り返し続いていく。そんな物事の繰り返しを語るこの言葉は、人生の真理だなと感じさせられます。

でも、わたしたちの人生は、良いことばかりだけではなく、悪いことも繰り返し、繰り返し起こります。だからでしょうか。物事が繰り返されていくことを教えるコヘレトの言葉に、むなしさや悲しみを感じます。私たち人間が何度も、何度も、過ちを繰り返していることは、物事が繰り返されることにむなしさや悲しみを覚えてしまう、大きな原因の一つなのでしょう。ただ、人の過ちや悪や罪は、単に繰り返し起こっているわけではありません。更に悪くなっていくんじゃないかと思うことさえあります。繰り返される失敗から何も学ばず、何も反省できないと、自分自身のことを振り返ったり、世界で起こる出来事を見つめる度に強く思わされます。医療の発達により、人の命を助ける技術や手段が日々進歩しているのはとても有り難いことです。

でも、それと同時に、人を殺める技術の開発も進みました。今では、AIによって敵を判断し、自律型の攻撃を行うドローン兵器によって、人間の判断を介することなく、人の命が奪われるほどです。そのように、命が簡単に踏みにじられ続けている現実を私たちはこの数年の間、戦争の被害を告げるニュースを通して何度も何度も、嫌と言うほど、見聞きしています。繰り返されているのは、戦争だけではありません。人の尊厳や権利は、何度も何度も無視され、踏みにじられています。肌の色、話す言語、性別、年齢、生まれた場所などを理由にして、どれほど差別が繰り返されていることでしょうか。また、地球の環境が悪くなるばかりで、異常気象であることをどれだけ実感し、日本を始め、世界各地で起こる洪水の被害や夏の異常な暑さによる健康被害をどれほど知ったとしても、改善のために動くよりも、これまで通りの生活や習慣を私たちは繰り返してしまっています。過ちを引き起こし、誰かを傷つけるとわかっていながら、そんな悲しい繰り返しの中から抜け出せずにいます。

誰かを傷つけ、断絶を生む、このような繰り返しは、何も今に始まったわけではないと、聖書はその始まりから告げています。きょうはさきほど、ヨセフ物語と呼ばれる、ヨセフという人物を中心に語られる長編ストーリーの一場面を読んでいただきました。この物語は、ヨセフの兄弟たちの大きな過ちから始まります。ヨセフには10人の兄と1人の姉、そして1人の弟がいました。ヨセフはたくさんの兄弟た

ちの中で、最も父親から愛されている人物でした。通常、古代イスラエルの文化の中で、家族の中で最も大切にされているのは、長男、一番最初に生まれた男の子です。長男こそが、その家の財産や父親の権利などすべてのものを引き継ぐことを誰からも期待されている、重要な存在だったからです。ですから、古代イスラエルの社会がそのような文化であることを考えると、下から二番目に生まれたヨセフが父親から一番愛されていることは、不自然なことでした。そして何よりも、そのことは、兄たちからの恨みや妬みを買うことに繋がりました。ヨセフを妬む兄たちは、ある日、彼を穴の中に投げ込みました。彼を殺すか、奴隷として売るか相談している間に、ヨセフを見つけた商人たちの手によって、ヨセフはエジプトへ奴隷として売られてしまいました。エジプトで奴隷として過ごした後、ヨセフはエジプトで重要な役職に就きます。その後すぐに飢饉が起こりました。周辺の地域からたくさんの人たちは、食べ物を求めて、エジプトに押し寄せてきました。ヨセフの兄たちもです。

さきほど読んだ創世記44章は、そんなヨセフがエジプトで自分の兄たちと再会した場面です。でも、当然、そこには感動などありません。自分が奴隷となるきっかけを作り出したあの兄たちがいるのですから。自分に悪いことをした兄たちに正直に、自分の正体を明かすのは怖かったのでしょう。兄たちがあのときのままだったならば、自分のことを妬ましく、憎たらしく思っていたままなら、仲直りなど出来るはずもないのですから。ですから、ヨセフは自分の正体を隠して、エジプト人としてお兄さんたちに会います。そして、ヨセフは彼ら

を試しました。ヨセフは自分の執事に指示を出して、お兄さんと一緒にエジプトに来た弟のベニヤミンの袋の中に、彼らがエジプトで購入した食料と一緒にヨセフ愛用の銀の杯を忍ばせました。ベニヤミンがヨセフの杯を盗んだかのように見える状況を作り出し、ベニヤミンに無実の罪を押し付けました。そうすることによって、ヨセフは自分の兄たちが弟のベニヤミンを見捨てるのかどうか見ようとしました。あれから何年も経ったが、兄たちは変わったのだろうか。それとも、あの時のままなのだろうか。ヨセフは兄たちを見極めようとしていました。そんなヨセフの企みによって、ベニヤミンの袋の中からヨセフの銀の杯が見つかった時、ヨセフはこう言って、彼らの罪を問いました。「お前たちのしたこの仕業は何事か」(44:15)。

実はこの問いかけは、少しだけ形を変えて、何度も何度も創世記の中で繰り返されています。たとえば、エデンの園でアダムとエバは神から問いかけられています。食べてはいけないと神から言われた善悪の知識の実をふたりが食べてしまった時、神は言いました。「何ということをしたのか」(創世記3:13)。直訳すると、「あなたの行ったこれは、何か」です。神から直接問いかけられたのはエバですが、ヘブライ語ではアダムは「人類」、エバは「命」を意味します。なので、私たちはこの問いかけをもっと象徴的に受け止めても良いと思います。つまり、人間は神との約束を破った時、神から問いかけられました。「何ということをしたの

か」と。対話の末、神が用意した場所であるエデンの園に人は住み続けることができなくなりました。そして、彼らは、人は、神から離れていきました。

アダムの息子のカインも、同じように問いかけています。カインは自分の弟のアベルを殺してしまいました。自分の罪を認めないカインに対して、神は言いました。「何ということをしたのか」(創世記4:10)。そして、カインもまた、神のもとを離れていきます。

この問いかけはまだまだ繰り返されます。アブラハム、イサク、ヤコブと、創世記に登場する主要な人物たちは、繰り返し、繰り返しこの言葉を問いかけられます。決まってそこにはトラブルがありました。彼らは、王や自分の叔父から過ちを指摘され、「何ということをしたのか?」と問いかけられます。結果はいつも同じです。トラブルのあった相手と離れ離れになってしまいます。ですので、「何ということをしたのか」という問いかけの繰り返しを通して、人間の罪や、人間同士の溝が深まっていく様子が創世記の中では表現されています。それは、とても悲しい繰り返しです。

でも、ヨセフの物語ではどうでしょうか。ヨセフと兄弟たちは既に関係が引き裂かれています。兄たちの過ちによって、もう既に、一緒に暮らすことが出来ていません。でも、「お前たちのしたこの仕業は何事か」とヨセフが問いかけた時、創世記の物語はこの繰り返しをやめました。兄弟たちの関係が完全に引き裂かれる決定的な場面となったからではありません。これまで繰り返されてきた結果とは、正反対の出来事が起こったからです。この時、ヨセフの兄であるユダは、自分たちが過去にヨ

セフにしてしまった過ちを認めつつ、弟のベニヤミンをかばっています。決して、弟のベニヤミンを見捨てませんでした。きょうは読みませんが、この後、兄の思いを知ったヨセフは自分の正体を明かします。そして、この兄弟たちは和解へと導かれていきます。離れ離れになっていた兄弟たちは、一緒にエジプトで暮らすようになります。かつて、兄たちの過ちによって、引き裂かれてしまったひとつの家族が神の導きを通して、お互いのことを赦し合い、また一緒に暮らせるようになる。そんな喜ばしい物語の結末が描かれますが、「何ということをしたのか」という問いかけに注目して、創世記全体を読んでもみると、このようなフィナーレを飾る物語が創世記の終わりに入れられたことに驚きを覚えます。「あなたのしたこのことは、一体何なのか?」この問いかけの繰り返しを通して、罪が深まり、人間同士の溝が深まり、神と人間の関係が傷ついている様子が何度も何度も描かれてきました。でも、ヨセフの物語では、結果が逆転します。これまで繰り返されてきた結果は、誰かの過ちによって、人間が神に背を向け、人間同士が離れ離れになってしまうことです。でも、ヨセフの物語で、兄弟たちの間には和解が生まれ、彼らはエジプトの地で再び一緒に暮らし始めます。創世記という書物を最終的に編集した人たちは、このようなヨセフの物語を通して、傷ついてしまった人間同士の関係をまた取り戻し、回復できるという希望を読者である私たちに示そうとしているのだと思います。繰り返

返され、ますます悪くなっていく人間の罪や悪を、人間同士の間にある敵意や憎しみを、断ち切る日が来る。そんな希望を創世記は私たちに指し示しています。

この世界や私たちの生きる社会に、いろいろな溝があるのはみなさんご存知のとおりです。いろいろな罪や悪や過ちが繰り返されています。その度に、断絶が起こり、人と人との間の壁が分厚くなり、溝がますます深まっていくように見えます。人間同士も、人間と世界の関係も、そして神との関係も深く傷ついています。お互いに傷つけ合う度に、問いかけてしまいます。「どうしてこんなことを？」そんな問いが繰り返される毎日です。いつまでもこの問いかけが続くことを想像すると、とても悲しく、そしてとてもむなしい気持ちになります。でも、創世記の物語は、そんな悲しい繰り返しが終わることを信じる事が出来るよ。期待することが出来るよと、わたしたちに希望を語りかけているようです。もしも、私たちが、「どうしてこんなことが？」とつぶやいた問いかけが今日、終わりを迎えるならば、何と嬉しいことでしょうか。

そんな嬉しいことが私たちの世界で、私たちの生きる社会で、私たちの日常の中で、起こりうると、創世記は語ります。何よりも、聖書はこう語ります。

「キリストはわたしたちの平和」と。繰り返される過ちや罪や悪の連鎖をイエスさまが断ち切ってくださいと私たちは信じています。そして、イエスさまがこの世界に平和を築いてくださると私たちは信じています。残念ながら、わたしたち自身に人々の間に大きな壁を作り続けるような、悲しい繰り返しを終わらせる力はありません。でも、平和の神が、

繰り返される悲しみを断ち切り、この世界に和解を引き起こしてくださると私たちは信じています。

日曜日に集まり、一緒に神を礼拝する私たちは、この希望を世界に宣言する平和の使者です。この繰り返しを少しでも終わらせたい。この繰り返しが終わっていくことを信じたい。私たちはそんな祈りや思いを積み重ねながら、神が繰り返しを終わらせてくださるその瞬間をいつも待ち望んでいます。繰り返しの先にあるものは、人と人との関係の破綻とえてしまうかもしれません。でも、平和を望む神は、その繰り返される破綻を終わらせ、新しい関係を紡いでくださる方です。ですから、わたしたちは平和の神を信じて、とても小さなことかもしれないけれど、できる限りのことを積み重ねていきましょう。そして、何よりも、平和の主であるキリストにあって結ばれている私たち教会こそが、この繰り返しの終わりを希望のうちに力強く宣言するような場所であり続けますように。そう、みなさんは、繰り返しの終わりを、私たちににとっての、そしてこの世界にとっての喜びの知らせとして、この世界に宣言できるのです。